

徳ニ感ジ得道セシ者ト云フ、師弟一雙ノ骸骨、近世マデ存セルガ、大地震アリテ深谷ニ墮失タリ、此ヨリ少シク東ニ一骸骨アリ、六七十年前、或行者入寂ノ骨ナルヲ、今人安山ガ遺骨トスルハ非也ト云フ、是山ナル骸骨故ニ密ニ此ニ持出シテ、名モナキ者ニ名チ付シナリト云フ、此ヨリ下レバ井ノ如キ水アリ、金名水ト云フ、行者身祿此水ヲ汲テ御身貫富士山ノ名號ノヤウヲ書シト云フ、今行者共吉田ヨリ竹筒或ハ備前德利ヲタヅサヘ、汲歸リテ御水ト稱スル者是ナリ、今モ吉田邊十郎右衛門、此水ヲ以テ御身貫フ、初穗ハ金百疋也、内濱ヲ行ク者ハ釋迦ガ嶽ニ到ラズ、阿彌陀ケ窪ヲ左ニシテ此所ニ出ヅ、共ニ薬師ガ嶽ヨリ元路ヲ下リテ八合目ニ到リ、スベリ道ト云フ所ヲ下ル、マヅ走草鞋ト云フ物大サ平常ノ如シ、三重バカリヲ著、一步進ムレバ砂礫トトモニ走リ下ルコト七八尺、時後ヨリ巨石ノ轉ビ落ルコトアレバ、跡ヨリ下ル者聲ヲカケテ知ラス、疲ヲ覺ユレバ、處ニ隨テ仰キ臥シ、或ハ杖ヲ石隙ニ擰フ、カクノ如クシテ下ル事一瞬數百歩、五合五勾目砂篩ヒト云フ所ニ下リテ止ム、小屋アリ、○中此ヨリ左ニ下レバ小御嶽、右ハ中宮ニ下リ、初ノ道ヲ下向ス、

〔笈埃隨筆二〕富士山

抑富士峯の秀麗たる、本朝に古今賞するのみにあらず、異國の史籍にも又詳也、謝肇制曰、莫高於娥眉、莫秀於天都、莫險於大華、莫大於終南、莫奇於金山、莫巧於武夷、其他雁行而已と、富士皆是を兼たり、實に三國第一山といはんに耻べからず、其神秀なる面向不背にして、兒女といへども、其名をしり、見すして其形を知るは此山のみ、西南駿州大宮口を表とし、東北は相州走口、西北は甲州吉田口、此三ヶ所より登山す、甲駿豆相の四州に跨り、吉田口一の鳥居より頂上迄、直に登事三百五十七間と云、峯は八葉の花形に倣ヘ芙蓉峯といふ、祭神木花開耶姫命、則淺間大權現と稱す、禁の三所各々新宮あり、神社頭嚴重也、役行者初て登山有しより、表口を大日とし、裏口を薬師とす、今登山のものには、淨衣の上に、牛王寶印を押て禪定の證とす、總じて山形關八州に望み、見るに